
肉　～異譚～

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肉く異譚く

【Nコード】

N0673G

【作者名】

るつね

【あらすじ】

十二月八日、須美子は息子を殺した……。

（前書き）

今作は、拙作『肉』の番外編とでも言えますか……ちょっと設定は変わっていますが、大体そんなような位置づけです。より楽しんでいただくために、先に前作をお読みになることをお勧めします。逆に、今作を読んでから前作を読むと、面白さが半減、どころかほとんどネタバレに近いものがありますので、ご注意ください。

須美子が弥太郎を殺したのは、十二月八日のことだった。

「母っちゃ、腹へったよう」

「ごめんねえ、弥太よう」

そう言つて、須美子は弥太郎の頭を撫でる。虱しらみが湧わいていた。それを取つてやりながら、須美子は、

「ごめんねえ」

繰り返した。

食事は、一日に一杯の粥のみ。ここ最近では、それさえ用意できない始末だった。去年は、こんなことはなかったのだが……。

夫が倒れたのは、秋の初め。以来、全身に麻痺が残り、寝たきりの状態だった。当然、出稼ぎにも行けない。

「腹へったよう、何か食わしてくれよう」

繰り返し、弥太郎は言う。

「ごめんねえ」

須美子も同じ返事を繰り返す。が、わずかにその語気に苛立ちが混じり始めたようでもある。

誰かに助けてもらおうにも、このあたりに親類縁者はいない。隣の家にも米を借りようと思つたこともあつた。

「わしらが助けてほしいくらいだわ」

そう言われ、無下に断られた。もう、米は尽きかけている。米だけではない。他に食べれるようなもの——草などの根も含めて——も、ほとんどなかった。親子三人、このままでは餓死を待つのみである。

「何か食わせてくれよう」

弥太郎は、まだ駄々をこねている。

「具合はどうです」

「きよ、うは、すこし、きぶ、んが、いい」

夫は、震える唇でその声を紡^{つむ}いだ。

「やた、ろうは、どう、してる？」

「変わりありませんよ」

「そう、か」

夫は、一息を吐き、

「お、れのめしは、いら、ねえからなあ。やた、に、くわしてやれ、よ」

「はい」

ここ数日、夫は水以外何も口にしていない。食欲がないわけではないだろう。遠慮しているのだ。自分が家族の重荷になっている、と考えているのだろう。

（優しい人）

そこを好いた。好いて好き合つて、駆け落ち同然に一緒になった。この人は死ぬ。このまま、何も口にしなければ。そう考えるだけで、須美子は恐怖に近い焦燥感に駆られた。なんとか、なんとかしなければ。

「母っちゃ、腹へったよう」

弥太郎が部屋に入ってきた。

「我慢なさいな」

須美子はわずかに、だが確実に苛立ちを含んだ声で言う。

「やだやだ、なんか食わしてくれよう。おいら、腹がへって死にそうだよ」

そう言う弥太郎が、一番食事の量が多いのである。

「や、たあ」

夫が優しく目を細め、

「そ、この、たなのうえになあ、かり、んとうがあるから、たべ、

て、いいぞ」

「ほんとか、父っちゃ？」

弥太郎は素早く棚の上を探り、かりんとうの袋を取った。

「さ、ここにいと父っちゃの身体に障るから。あっち、行こうな」
弥太郎の手を取り、須美子は部屋を出る。ぷっくりした手だ。頬にも、まだ張りがある。夫の痩せこけた身体とは、えらい違いだ。

須美子は弥太郎の手を引いたまま、外に出た。なぜかは分からない。ただ、弥太郎を夫の傍にいさせることに、理由もなく罪悪感があつた。

「なあ、母っちゃ」

弥太郎が袋を逆さに振っていた。

「なくなっちゃった」

「もう食べちゃったんか？」

「また父っちゃんにもらってくる」

無邪気にそう言つて、家の中に戻ろうとする弥太郎。

突如、須美子は目がくらむほどの怒りに駆られた。夫が殺される。

弥太郎に夫が殺される。

気付くと、須美子は血に濡れた拳大の石塊いしくれを握りしめていた。

弥太郎は倒れている。倒れたまま、動かない。

「す、みこ」

「何です？」

「こ、の、にく、どうし、たんだ」

「隣村の与作さんが分けてくれたんですよ。熊を撃ち殺したけど、食べきれないからって」

「よ、さく、がなあ」

特に親しいわけでもない男の親切に、多少疑問を持ったようだが、すぐにそれは霧消したらしい。元来が人の好い夫なのである。

須美子は鍋から肉を掬すくつて、夫に差し出した。ぷりつと張りがあ

って、適度に降っている脂肪がてらてらと光り、食欲をそそる。

「はい、口を開けて」

「おれ、は、いいから、や、やたに」

「あの子は、もう充分食べましたよ」

「そ、そう、か」

「はい、どうぞ」

夫は肉を口に含み、ゆっくりと咀嚼そしゃくした。

「うまい」

そう言って微笑む夫を、須美子はじっと、底のない穴のような瞳で見つめている。

三日後、夫はこの世を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673g/>

肉　～異譚～

2011年1月23日15時23分発行